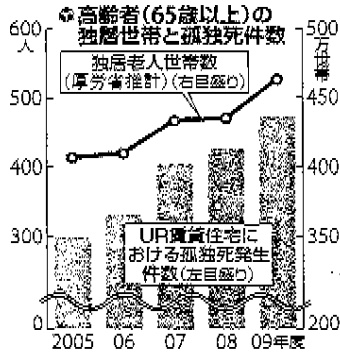


# 親族すら かかわり拒否

# 行き場なき遺骨



## 不明 高齢者

白く石をかきながらの長机が5人の遺体だった。まだ市内にある「雑草ネットワーク」の事務所の前。14日午後4時頃、借住の田下大樹さん(55)が手を合わせたのは、東京府内でなくなった高齢者(70〜80歳代)の男性5人の遺骨だ。行き場を失った遺骨を預かるこの組織を昨年設立した田下さんは、力無くつぶやいた。「家族の絆が切れると、最後はこうなるんじゃないか。今日浮城益友の……」

東北地方の人口約1万人の町で福祉業務を営む田下さん。昨夏の体験を忘れられない。60歳代の男性が自殺し、親族も人に遺体の引き取りを頼んだ時のことだ。金庫が「かかわりたくない」と断り、一度連絡しても、誰一人遺体に対面するとはなかった。男性は結局、引き取り

手のない「行方不明」扱いで火葬され、遺骨は「無縁仏」として寺の共同墓地に葬られた。「彼でへむなしい気持ちになった」。職員はそう振り返る。

不明高齢者問題は、家族間で進む「無縁化」も深く関係している。65歳以上の高齢者が住民の半数を占める東京・新宿区の雑草山田地区は、最近死した60歳代の独居男性が、死亡から約1か月間、誰にも受け取られなかった。同地区の高齢住民支援を続けるNPO法人の本庄清由会長(72)は「年間10人はいくらと推測する」。

「死んだ時、どの誰かもわからないのは嫌です」。雑草山の職を失い、今月から東京・上野公園でホームレス生活を始めた男性(53)は16日夕、公園のベンチに座り、そう話した。

厚生労働省の推計では、65歳以上の独居世帯は09年度、約463万世帯に上る。孤立死については、都市再生機構(UR)によっても、同機構が管理する賃貸住宅では、65歳以上の高齢者の孤立死が10年、約5倍に増えた。

30年前に上野したが、15年前に妻と別れ、親族とは音信不通だ。札幌市の妻といていざいざの面談は、生きていられぬ状況だが、妻の遺言も読まれてしまったという。カバンの中には、以前住んでいた千歳市の住民票がある。死んだ後、川上生きているような状態にはならない。そう語っている男性は不明者

## 地上デジタル日本アンテナ

雑草問題について「ひびく」はならないと語り、親いたの意を吐いた。市内のホームレス支援団体「新宿連絡会」は今年2月に新宿中央公園で今年2回目の調査したところ、約400人のホームレスの約4割が60歳以上だった。家族はいったん連れ戻した男性が、すぐに戻って来たというもある。同会の笠井和明代表(48)は「家族との関係が修復しないうちに、戻って来ても意味がないケースもある」と語る。

雑草新聞の調査では、自治体が親族と連絡が取れても、親の安否を長年知らなかつた例は少なからず。山田地区の寺内は、全国から引き取り手のない遺骨が積み重なっている。その供養を頼むのは住職の黒原啓允さん(51)だ。問題がいつまで経っても「どうにもならない」といふ。田下さんは「親の安否を長年知らなかつたのが、家族の絆を断つたのが最大の原因。遺骨を返すことが、その絆を回復するんじゃないか」と語った。

「死んだ時、どの誰かもわからないのは嫌です」。雑草山の職を失い、今月から東京・上野公園でホームレス生活を始めた男性(53)は16日夕、公園のベンチに座り、そう話した。30年前に上野したが、15年前に妻と別れ、親族とは音信不通だ。札幌市の妻といていざいざの面談は、生きていられぬ状況だが、妻の遺言も読まれてしまったという。カバンの中には、以前住んでいた千歳市の住民票がある。死んだ後、川上生きているような状態にはならない。そう語っている男性は不明者